

## 研究室便り（2005年度）

卒業生の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

現在、西洋史学研究室のスタッフは、ドイツ中・近世史がご専門の神寶秀夫教授を主任として、現代史（国際社会主義研究）の山内昭人教授、フランス中世史の岡崎敦助教授の3名の先生方で構成されております。さらに、本年度より、福岡大学からドイツ現代史の星乃治彦先生をお招きし、中世から現代までの幅広いテーマをカバーする充実した講義・演習が開講されています。また、歴史学研究のための基礎訓練として実習が行われており、西洋史研究を始めるにあたって知的生産の技術の修得やデータ処理の方法、歴史の見方や考え方を理論的に把握すること、さらには自分のテーマを見つけ、研究史をおさえ、卒業論文を完成させるまでの一連の作業・方法論について、大変きめ細かい指導が行われています。恒例の卒論構想発表会も3年生の冬を第1回とし、最終的に題目を決定する4年生の11月まで計4回が催され、学部学生は恵まれた環境の中で、卒業論文を目標に日々研究に励んでおります。

学会・研究会活動につきましては、12月には九州史学会西洋史部会、3月と10月には九州西洋史学会が開催され、シンポジウムや合評会では遠方の研究者もお招きするなど、大変充実した企画が行われました。また科研研究会「近代国家研究会」、同じく科研研究会「西欧中世史料論研究会」、ラテン語読書会「タキトゥスの会」など、研究会活動も活発です。昨年10月には経済学部との共催でレウヴェン大学のエーリク・アールツ教授をお招きし、「カール5世期南ネーデルラントの経済と社会」と題する講演会が行われ、独・仏・英語が飛び交う国際的な討論が繰り広げられました。さらに1月のCOE「比較史料論研究会」では、ブリュッセル自由大学のジャン=ピエール・ドゥヴロワ教授による西欧中世初期の史料論に関する報告に、日本史研究者のコメントも交えた活発な議論が行われました。このように研究室は、九州における西洋史研究の拠点、また学術交流のトポスとして、周辺各大学・研究室のご協力とともに歩みを進めております。

研究室に所属する学生は総勢34名となり、大変活気に溢れています。昨年は、ここ数年間中断していた夏休みの合宿も復活し、皆で鹿児島に行ってまいりま

した。現在、学部生の安部真代さんは交換留学生としてルートヴィヒ・マクシミリアン（ミュンヘン）大学に留学中であり、近年では学部生の中に留学する学生も増えてきました。修士課程にはフランス中世史の千原隆太君と、イギリス中世史の安部恵理香さんが在学し、修士論文の作成に必死で取り組んでおります。昨年度修士課程を修了した大場はるかさんは、ドイツ学術交流会奨学生としてミュンヘン大学博士課程に所属し、ドイツ近世史研究を継続しています。また博士後期課程には、ブルガリアの社会主義運動を専門とする岡部直樹君、現在スイス政府給費留学生としてバーゼル大学に留学中でドイツ・スイス中・近世都市史専攻の森崇浩君、古代ローマ史の谷本拓也君が研究者への道を邁進しています。さらに、昨年は中世ブルゴーニュ国制史を専門とする中堀博司さんが課程博士論文を提出し、11月に博士号を取得されました。この大変おめでたいニュースをもちまして、現況報告を締めくくりたいと思います。

なお、本年度も引き続き、フランス近世史を専門とする小山啓子が助手として本研究室に常駐しております。これまで培われてきた研究室の良き伝統と今後のさらなる発展に少しでも寄与できればと思っております。研究室の様々な活動や最新のニュースにつきましては、ホームページ [http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/his\\_west/](http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/his_west/) の方もぜひご覧下さい。

卒業生の皆様、お近くにお越しの際は研究室にお立ち寄りいただき、後輩たちを叱咤激励して下さいましたら大変幸いです。また、ご著書を刊行なされました節には、是非とも当研究室にご寄贈くださいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご健勝と一層のご発展を心よりお祈り致しております。

2005年6月  
(小山 啓子)